

## 固有名をもつ器物の一代記

### ——『蘭亭記』をめぐる——

成田 健太郎\*

唐の何延之の著として伝えられる『蘭亭記』は、王羲之の代表作とされる書跡『蘭亭』の履歴を伝える文献であるが、その内容の信憑性には疑問もあり、むしろ伝奇テキストとしての分析が求められる。『蘭亭記』は、個別の器物を主題とし、その固有名と「記」の組み合わせをタイトルとする点が独特で、そのようなテキストが実現した環境として、出来事を叙述する「伝」と「記」の存在、なかでも漢訳仏典の写本を主題とした「記」の存在、そして伝奇テキスト『古鏡記』の存在が注目される。また、『蘭亭記』は異なる物語を書跡の名の下に包摂した伝奇テキストであり、今後の研究はそのような構造への理解を前提として進められることが望まれる。

キーワード…王羲之、蘭亭、何延之、伝奇

### 一

を自ら述べるエピソードとなっている。

唐末の張彦遠が編んだ書論叢書『法書要録』<sup>1</sup>巻三には、唐の何延之の著として『蘭亭記』が収録されている。順を追ってその内容を確認すれば、まず東晉の永和九年（三五三）春三月、王羲之が会稽山陰の景勝地蘭亭に当時の名士を招いて禊ぎの儀式を催し、その折に詩序を書写する。その書跡『蘭亭』は羲之の裔孫智永へ伝えられ、さらに智永の弟子辯才へ伝えられる。その次の、唐太宗が『蘭亭』の存在を知って、監察御史

の誕生から消失に至るまでの全履歴を記すもので、後世の多くの人々がその記載を通して『蘭亭』の人文的価値を理解しまた享受してきた。しかしながら、この『蘭亭記』の記載内容については、つとに南宋の趙彦衛が多くの矛盾を指摘し、信ずるに足りないと言難している。さらに小川環樹は

の蕭翼を遣わして辯才からだまし取らせるくだりは、「賺蘭亭」（賺はだまし取る意）の故事として著名である。さらに太宗は、手に入れた『蘭亭』を搨書人に複製させ、のち太宗が崩ざると、その真本はついに昭陵に副葬される。そして最後の一段は、何延之が『蘭亭記』を著した経緯

何延之の記は文体が小説伝奇に類似し、ことばづかいはやや平俗である。単なる記録者の態度ではなくて、かりにそういう話の核になることは伝わっていたとしても、よほどの小説的潤色を加えて作られたとの印象は拭い難い。<sup>4</sup>

\*なりた・けんたろう、埼玉大学大学院人文社会科学部研究科准教授、中国古典学・書学書道史。

という。事実の記録としての可否を論うことに終始せず、伝奇テキストとしての性質を指摘したことは卓見といえる。以下本稿では「伝奇」の語を、ある特定の珍奇な出来事を叙述することとして使用する。

この『蘭亭記』の伝奇的性格については、のちに福本雅一が

王羲之の蘭亭叙は、唐の太宗が策略を弄して詐取したという、「賺蘭亭」の故事により、帝王無価の宝として広く知られているが、更に昭陵殉葬のエピソードが加わることによって、その評判はいやましたといつてよい。

と、さらに萩信雄が

『蘭亭記』には、「……監察御史蕭翼なる者は、梁元帝の曾孫」、「辨才は俗姓袁氏、梁の司空昂の玄孫」という。このように伝えられると、登場人物の配置の妙に、感心させられる。梁元帝、名は蕭繹。博学ならびなき文人皇帝、武帝蕭衍の第七子。司空の袁昂は、書をもつて武帝の側近となり、その勅命によつて『古今書評』を撰した。こうした書史上の人物に連なる後裔が、互いにだます側とだまされる側に分かれ、一場の奇しき物語を演ずるのは、何とも巧妙な舞台仕立てではなからうか。

と、いつそう具体的に論及している。

これらの先行研究を踏まえれば、『蘭亭記』に対しては、書道史の史料としての信憑性を検証する以外にも、それが伝奇テキストとしていか

に書かれているかを文学研究の方法によつて明らかにすることが、さしあたって取り組むべき作業として残されているように思われる。本稿ではその作業の端緒として、『蘭亭記』のような伝奇テキストが可能になった文学史的条件を検討し、もつてその文学としての特質を明らかにしたい。

## 二

そもそも『蘭亭記』は、そのタイトルが示すとおり、『蘭亭』という書跡を主題としたテキストである。書跡を主題としたテキストといえば、唐より前では、『法書要録』巻二に、陳の智永の著として『題右軍樂毅論後』が収められているが、これは王羲之の書跡『樂毅論』に対して従たるテキストといえる。『蘭亭記』が同様に『蘭亭』に対して従たるテキストでなかったかどうかは検討の余地があるが、しかし少なくともタイトルは「序」や「題」ではなく、他への従属を前提としない「記」となっている。また『蘭亭記』は、上述のように伝奇的性格をそなえており、そのことによつても、書跡『蘭亭』に対する単なるコメントの域を出ている。いずれにせよ、書跡を主題とするテキストは唐より前には少なかったといえる。

範囲をやや広げるとすれば、書跡は文物であり、さらに広げればそれは器物である。器物を主題とするテキストの様式としてまず想起されるのは、賦であろう。賦の主題は言うまでもなく広汎にわたるが、そのなかには身の回りの器物を主題とするものがある。ただしそのような賦は、基本的にある種類の器物について全般的な叙述をおこなうものであり、個体差を話題にすることがない。たとえば後漢末建安年間の曹丕、王粲、

陳琳による一連の『馬瑙勒賦』<sup>7</sup>は、曹丕の所有する瑪瑙製の馬具を主題にしたものであることがその序によつて知れるが、本文はやはり「馬瑙勒」という種類の器物全般について叙述するものとみてよい。つまり、賦は個別の器物を主題とするにふさわしいテキスト様式ではないのである。

もちろん、賦が個別のことがらを叙述することはあつて、京師など個別の地点を主題とすることもあれば、後漢の王延寿『魯靈光殿賦』のように個別の建築物を主題とすることもある。建築物ともなればかなり器物に近づくように思われるが、しかしそれは移転することのできない不動産であつて、容易に移動できる器物とはなお一線を劃している。つまり、賦は存在物としてあるいは知識として公有され、衆人に認知されているものごとについて叙述するのであつて、特定の個人が私有して公開せずにいられるような個別の特色ある器物は、賦の主題になりえないのである。

さて、西晉の楊泉『草書賦』や南齊の王僧虔『書賦』は、書を主題とした賦であるが、やはり「書」や「草書」という技能ないしその成果物の全般が主題になつていて、右に述べた賦の主題についての見地に違わない。また、これらの賦の存在から、当時「書」や「草書」が知識として十分に公有されていたと推察することもできる。そして重要なのは、個別の書跡を主題とした賦は作られなかったことである。その要因として、個別の書跡をとりたてて話題にしようというアイディアが生じなかったことも考えられるし、かりにそのようなアイディアがあつても、賦という様式はその受け皿にはなりえなかったと考えられる。

それでは、賦以外のテキスト様式はどうだろうか。まず個別性ということであれば、個別の人物について叙述する伝という様式がある。人物

の伝は、通常個別の人物の生誕から世を去るまでの経緯を遺漏なく叙述する。『蘭亭記』は、『蘭亭』という個別の器物の誕生から消失までの経歴を記すもので、いわば「器物の伝」に相当するテキストである。

個別の器物について、その経歴を述べる言説は、古くからあつたはずである。たとえば「和氏之璧」という名の玉璧について、『韓非子』和氏篇<sup>10</sup>にはその発見から楚王に献上されるまでの経緯が語られ、『史記』廉頗藺相如列伝<sup>11</sup>では、この玉璧の存在が趙と秦との間に繰りひろげられた政治劇を彩っている。もちろんこの二つの物語に見える「和氏之璧」が同一の器物である保証はないが、同じ固有名をもつて語られていることは重要である。つまり、個別の器物「和氏之璧」について、その数ある物語を総合し、首尾一貫した「器物の伝」に仕立てることは、決して不可能なことではなかった。しかし、そのようなテキストは見あたらないのであつて、やはり個別の器物についてその全履歴を記すというアイディアも、それを許容するテキスト様式も、古くから存在したわけではないことが知れる。

### 三

右に述べたとおり、『蘭亭記』は個別の器物の全履歴を記す点で、個別の人物の全履歴を記す伝と相似形をなすわけだが、その主題が器物である以上「伝」と称することはできず、「記」という名乗りが選択されたと見ることができる。

記とは、記載、記録の義であり、古くは『礼記』『史記』等の書名に見えるほか、魏晉以後には西晉の潘岳『関中記』や陸機『洛陽記』のように、地名と「記」を組み合わせる書名とした地理書がある。こうした

地理書の形式は、伝奇テキストの一つの揺籃でもあり、たとえば『西京雜記』は、地理書らしい書名を持ちながら、その実は伝奇集となつてゐる。また『陶淵明集』に収める『桃花源記』は、周知のとおり六朝を代表する傑出した伝奇テキストであるが、これは篇名に「記」を用いた早い例であり、「桃花源」もやはり地名と見なすことができる。

唐代伝奇になると、「記」は地名に限らず、陳玄祐『離魂記』のように、叙述対象たる出来事を代表する語との組み合わせでタイトルに用いられるようになった。他方、沈既濟『任氏伝』のように、人名をタイトルに用いる場合はやはり「伝」が選択された。すなわち、出来事を叙述したテキストに適した名乗りとしては、唐までに「伝」と「記」が準備されていたといえる。

ただし、『蘭亭記』は出来事を叙述してはいるけれども、タイトル中の「蘭亭」がその出来事を代表する語といえるのかどうかは疑問である。出来事ならば、その一部が現にそう呼ばれているように「賺蘭亭」などの語句を用いるのがより適当であるように思える。やはり『蘭亭記』のタイトルは、器物の固有名「蘭亭」と「記」の組み合わせと見るのがふさわしい。

器物の固有名と「記」の組み合わせをタイトルとする古い例としては、梁の僧祐『出三藏記集』巻七に、漢訳仏典の序および記が集中して収められているのが注目される。たとえばそのなかの一篇『普曜経記』には

普曜經、永嘉二年太歲在戊辰五月本齋、菩薩沙門法護、在天水寺、手執胡本、口宣晉言。時筆受者、沙門康殊・帛法巨。

『普曜経』は、(西晉の)永嘉二年戊辰(三〇八)の五月の本法会の  
おりに、菩薩沙門の(竺)法護が、天水寺にて、手には胡語の本を

執り、口からは晉言(漢語)を講じた。その時筆受した者は、沙門の康殊と帛法巨(炬)である。

とあり、西域出身の竺法護が胡語の『普曜経』のテキストを見ながら漢語に翻訳し、それを康殊と帛法巨の二人が書写するという、漢訳写本誕生のありさまが記録されている。

序は、主テキストに対して従たるテキストであり、主テキストが生成された経緯を記すものである。しかし厳密に言えば、テキストの生成は、著作としての発生とテキストとしての定着という二つの異なる出来事を含んでいる。そのことは通常あまり意識されることがないが、漢訳仏典においては、翻訳という工程の介在によつて、他言語による著作としての発生と漢語によるテキスト定着との間に顕著な時間差が生じるし、一つの著作が複数回翻訳されて異なるテキストに定着することもある。それゆえに、テキストをメディアに定着する書写行為に新たに注意が払われ、その結果「序」のほかに、より広汎な出来事を記述する「記」の名乗りが選択されたと見ることできよう。

さて、『蘭亭記』の主題たる『蘭亭』は、珍重される書跡であるが、同時にまぎれもなく一つの写本である。そして、写本を書跡として鑑賞する場合、著作行為ではなく書写行為が焦点化することは言うまでもない。つまり、『蘭亭記』に「記」の名乗りが選択されたことの意味は、右に見た漢訳仏典の記の事例と共通するように見えるのである。

さらに、『蘭亭記』には

其時適有神助、及醒後、他日更書數十百本、無如祓禊所書之者。  
その時は神秘的な力に助けられて書いたが、醒めてから後日またあ

らためて数十本数百本と書いたのに、襖ぎの儀式のときに書いた作  
に及ぶものがなかった。

といい、書の再現不可能性が強く印象づけられている。実は、書人がひ  
とひとり異なる書風をもつことは、南朝の書論にすでに言われていた  
けれども、書跡の個性性をかくまで強調した言説は、唐より前にはなかつ  
た。そして、唐代に書跡を主題として著された記としては、『法書要録』  
卷三に『蘭亭記』のほかに、武平一『徐氏法書記』、徐浩『古蹟記』、褚  
遂良『搨本樂毅記』、崔備『壁書飛白蕭子記』、張弘靖『蕭齋記』の五篇  
が収められている。本稿ではこれらの記については検討せずにおくが、  
『蘭亭記』のような伝奇的性格はそれらには見られない。

「記」という名乗りをもつさまざまなテキストの系譜を、以上のごく  
初歩的な観察によって正確にたどることはもちろんできないが、個別の  
器物を主題とする「記」が著される一つの契機として、テキスト定着な  
いし書写行為の個性性が発見され、個別の写本ないし書跡への注目が高  
まったことを指摘することはできるだろう。

#### 四

『古鏡記』は、唐代伝奇のなかでも成立が最も早いとみられる作品の  
一つである。『太平広記』卷三三〇（器玩二）は晩唐の陳翰の著『異聞集』  
からの引用として載せ、「王度」と題する<sup>13</sup>。また『太平御覧』卷九一二（獸  
部二四・狸）にも節録され、そちらは「王度古鏡記」と題する<sup>14</sup>。『太平広記』  
は原則として物語の中心人物の名をタイトルとするから、「王度」はそ  
の原則により改められたタイトルで、「古鏡記」が本来のタイトルであつ

たと考えられる。

『古鏡記』の物語は、一つの古鏡を王度とその弟王勣が前後して携帯し、  
さまざまな怪異を体験する。臨終に際して古鏡を王度に贈与した「隋の  
汾陰の侯生」によれば、古鏡は黄帝が鑄た十五鏡のうちの第八鏡である  
という。兄弟が古鏡をどこへ携えていっても、その地で必ず怪異が起こ  
るのだが、兄弟は生活上特に大きな影響を蒙らないし、つねに受動的に  
振る舞っている。このことから、『古鏡記』はこの古鏡の物語であり、  
器物を主役に据えた伝奇テキストであるとみることができる。

「記」を名乗り、物語の中心に衆多と異なる突出した特徴を有した唯  
一無二の器物を据え、それに関わった人々が数奇な出来事を体験する点  
は、『古鏡記』と『蘭亭記』に共通する。以下、個別の器物を主題にし  
た伝奇テキストの事例として『古鏡記』を参照し、比較検討を加えてお  
きたい。

まず『蘭亭記』は『太平広記』卷二〇八（書三）<sup>15</sup>に節録されているが、  
タイトルの処理は『古鏡記』と異なる。すなわち、『古鏡記』は王度一  
人が終始古鏡に関わるため、すでに述べた原則にしたがって「王度」と  
改題されているが、『蘭亭記』は『蘭亭』に関わる人物が次々に交替し、  
一人に限定しがたいため、「購（賺の誤写か）蘭亭序」と題されている。  
このことから、『蘭亭記』はより明確に『蘭亭』を物語の中心に置い  
ているといえる。

さらに『蘭亭記』は、冒頭「蘭亭者、晉右將軍會稽内史瑯琊王羲之字  
逸少所書之詩序也」と『蘭亭』の出自から説き起こし、その誕生から消  
失までの全履歴を、さながら人物の伝のごとく叙述する。一方で『古鏡  
記』は、冒頭で古鏡には言及せず、まず元の持主である侯生を紹介して  
いて、形式上『蘭亭記』ほどには器物への焦点化を徹底していない。ま

た『古鏡記』の古鏡は、黄帝に由来するとは言いが、物語中「鏡」と呼ばれるばかりで特には命名されていない。他方『蘭亭記』の『蘭亭』は、確乎たる固有名をもち、やはり器物への焦点化の度合に差があるといえよう。

二つの器物がその持主に体験させる出来事もまたあい異なる。古鏡の周囲で起こるのはすべて超自然的な怪異であり、最後に忽然と消え去ってしまうところも、その存在じたいが怪異であることを示している。一方『蘭亭記』の特に「賺蘭亭」の一段では、『蘭亭』をだまし取った蕭翼は太宗に褒賞され華々しい出世を遂げ、辯才は『蘭亭』を失ったショックのために死に至る。『蘭亭』は二人に両極端の数奇な命運をもたらしてはいるのだが、しかし出来事としては人事のありうべき範囲の中にとどまっている。『蘭亭』が最後太宗の遺命によつて地上から消え去ることも、それまでの出来事がすべて人為に帰因することを、そして『蘭亭』は決して靈物などではないことを説明しているだろう。

以上を要するに、『古鏡記』は器物への焦点化においてなお初歩の段階にあり、同時に志怪の文脈に依拠した伝奇テキストといえる。一方『蘭亭記』は、器物への焦点化を徹底し、より整った形式で器物の履歴を叙述し、人事の範囲内で実現された伝奇テキストといえる。

附言すると、『古鏡記』は、古鏡が隋末の大業十三年（六一七）に消え去ったことを記し、その成立時期は一般に初唐とされている。一方『蘭亭記』は、開元二年（七一四）に何延之が記録したものと明言している。すでに述べたとおり、その言は必ずしも事実として信頼できないが、『蘭亭記』の成立時期は早くて開元年間ごろということになる。つまり『古鏡記』の成立が『蘭亭記』に先行する可能性は高く、そのことは、右に述べたように器物への焦点化において『古鏡記』がより初歩の段階を示

していることと符合するといえよう。

## 五

以上の考察から、特定の書跡を主題とした伝奇テキスト『蘭亭記』が実現した環境として考慮すべき三つの状況が見えてきた。第一には、出来事を叙述するテキストとして「伝」と「記」が用意されていたことである。第二には、固有名をもつ器物である漢訳仏典の個別の写本を主題とした「記」がすでに著されていたことである。このことは『蘭亭記』に直接影響したとは必ずしもいえないものの、書写行為の個別性が注意され、それがテキストのタイトルにも表れていることは、物語における書跡への焦点化を可能にした条件として重要である。そして第三に、やはり直接の影響があったかは知れないが、個別の器物を主題とした伝奇テキスト『古鏡記』が存在したことである。

ただ、上述のように『古鏡記』において主題たる器物は固有名をもち、その伝奇的性格は志怪の文脈により多く負っている。他方『蘭亭記』は、主題たる器物に固有名を与えて、器物への焦点化をより徹底し、さらに志怪の文脈をも脱して、『古鏡記』よりも一歩進んだ段階を示している。以下、『蘭亭記』のこのような飛躍を可能にした条件を検討してみたい。

前節で見たように、『蘭亭記』は『蘭亭』の誕生から消失までの全履歴を叙述する。ただし、その叙述の全部が同時に成立したとは考えがたく、複数の物語を『蘭亭』という器物の下に包摂することで成立したと思われる。そのようなテキスト生成の手法は、複数の物語を一人の人物の名の下に包摂して、首尾一貫した一代記に仕立てるといふ、史書の列伝編纂の常道によく似ている。『蘭亭記』は、かかる手法を器物に応用



して生成された、器物の一代記といえるのである。

『蘭亭記』のテキストからは、そのような包摂の痕跡が見てとれる。たとえば、王羲之が『蘭亭』を書写した経緯を述べた直後には

右軍亦自珍愛寶重、此書留付子孫傳掌、至七代孫智永。

右軍（王羲之）も自ら「書いた『蘭亭』を」珍重愛惜し、この書は子孫に留めおいて伝承され、七世の孫智永に至った。

といい、その次には智永の出自から臨終に至るまで詳しく語っており、『真草千字文』を三十年代臨書しつつけて、そのうちの佳作八百余本を浙東の諸寺に寄贈したことなどを記す。しかし、実のところそのなかに肝腎の『蘭亭』は姿を見せない。臨終に際して智永がその「遺書」すなわち旧蔵書を弟子の辯才に与えたことは記されるが、そのなかに『蘭亭』が含まれるとは言っていない。

このような状況から、『蘭亭記』に先んじて「智永伝」というべき物語が存在したが、そのなかに『蘭亭』は登場しなかったと推定される。そして『蘭亭記』は、王羲之から智永へ、智永から辯才へという『蘭亭』通伝の系譜を述べるなかで、既存の「智永伝」を包摂したのである。

このような包摂は、構造上『蘭亭』を智永よりも上位に置き、さらにいえば書跡を書人よりも上位に置くものであり、そのことは書論史に照らしても特に注意すべき現象といえる。南朝においては、宋の王愔『文字志』今佚『法書要録』卷一に目録のみ存す、宋あるいは齊に成った『古來能書人名』、『法書要録』卷一、齊の王僧虔『論書』、『法書要録』卷一、等、書に関する言説を書人ごとに整理した著作が陸続と現れた。かく発達した書人列伝の体裁は、唐の張懷瓘による総合的書論『書斷』（七二七成書、

『法書要録』卷七・九）の卷中・下「三品優劣」にも継承されている。

すなわち、『蘭亭記』の成立に至るまでの時期において、書に関する言説を書人単位でまとめることは一般的であり、右に見た「智永伝」がこの時期に発生したことは自然にみえる。『蘭亭記』は、そのような手法における書人を書跡に置きかえ、構造を組み直すことで成立したテキストといえる。かかる組み直しが可能になった背景として、「記」を名乗るテキストにおいて個別の器物への焦点化が兆していたことはすでに述べたが、さらに『蘭亭』という強い個性を有する書跡が現れたことも見のがせない。

ただここで再び注意すべきは、『蘭亭』にそのような強い個性を認めるわれわれの観念も、実のところ『蘭亭記』の伝える物語に大きく負っていることである。つまり『蘭亭』と『蘭亭記』は、書跡が物語を生みだし、物語もまた書跡に個性を付与するという相互関係のなかで成立したと見ることができる。『蘭亭』の成立を詳らかにするには『蘭亭記』に見えるような物語をさらに掘り下げて検討する必要がある。

## 六

『蘭亭』の名の下に異なる物語を包摂して、『蘭亭記』は開元より唐末までの間に成立した。そしてそれは『法書要録』に録されるばかりでなく、北宋の太平興國年間（九七六—九八四）に官撰された大型類書『太平御覽』および『太平広記』（以下それぞれ『御覽』『広記』と略記）にも引用されている。ただし、それらは『法書要録』の収める全篇を引用することなく、出来事のみとまりごとに切り取って節録している。

まず『御覽』卷七四八（工芸部・書中）は、「何延之蘭亭記」を二条

引用しているが、その第一条は王羲之が『蘭亭』を書写しそれが智永に伝えられるまでを載せ、のち蕭翼がそれをだまし取ったことについては「爲蕭翼給而取之」と末尾にくく簡単に記すばかりである。そして第二条には、智永が『真草千字文』を臨書したことを載せる<sup>17</sup>。

なお、同巻の内容はすべて『法書要録』所収著作を引用するものであり、『何延之蘭亭記』も『法書要録』から引用された可能性が高い。つまり、『御覧』の編者は『蘭亭記』から王羲之と智永、あるいは『蘭亭』と『真草千字文』に関する言説を抽出して載せたと推定でき、このような作業は『蘭亭記』のテキスト生成手法のちようど逆を行っているように見える。先に確認した包撰の痕跡を、『御覧』の編者はしかと認め、また彼らにとつてより便利で適切なテキストを生成するために利用したのである。

そして『広記』は、太宗が『蘭亭』を手に入れる企てを起すところから、『蘭亭』が太宗とともに地上から消え去るまでを載せている。この部分は『御覧』では右に示したように簡単に処理されていて、一方で『御覧』の載せる王羲之と智永のくだりは『広記』に引かれない。ここに二書の役割分担が見えてくる。そもそも『御覧』一千巻は、その名のとおり北宋太宗の閲覧に供された格式の高い書物であるが、一方『広記』五百巻は、志怪を中心とする小説集であつて、書物の格としては一等下る。つまり『蘭亭』のくだりは『御覧』に載せるには不適とされ、『広記』に回されたのではないだろうか。

冒頭で紹介したとおり、小川、福本、萩三氏は『蘭亭記』の伝奇的性格を指摘しているが、右の観察によれば、『御覧』『広記』の編者もそのような性格を意識していて、なおかつその全篇にではなく、『蘭亭』の部分に対して特に強いそれを認めていたと推定される。福本、萩両氏が具体例として「蘭亭」の部分挙げているのは、まさに『御覧』『広

記』の編者と感覚を同じくしているのである。

最後に今後の研究を展望するならば、『蘭亭記』に限らずテキストを利用してより明らかな知見を得るためには、右に述べたような感覚をさらに磨いてテキストを解きほぐし、個々の物語やテキストの生成過程が、どの時代のどのような人々の書跡や書人に対する見方を反映しているのか、洞察を深める必要がある。本稿では、そのような作業を始めるための予備的考察を行ったにすぎない。

〔附記〕本研究はJSPS科研費1P19K13086の助成を受けたものです。

## 注

1 『法書要録』の本文はすべて『津逮秘書』本に拠る。

2 書跡「蘭亭」は、ほかに『蘭亭序』『蘭亭集序』『臨河叙』『禊帖』等いくつもの呼称をもつが、『蘭亭記』では一貫して『蘭亭』と称されるため、本稿でもそれに倣って『蘭亭』と呼称する。

3 趙彦衛『雲麓漫鈔』巻六、『叢書集成新編』第一一冊、台北、新文豐出版、一九八五年、七二六頁。

4 小川環樹「智永」、中田勇次郎編『中国書人伝』、東京、中央公論新社、二〇一五年、四八頁。

5 福本雅一「蘭亭嫌い」、『書の周辺・類筆集』、東京、二玄社、一九八一年、五八頁。

6 萩信雄「蘭亭序の流転」、『金石書史研究』、京都、藝文書院、二〇一六年、一七四頁。

7 『北堂書鈔』巻一二六に曹丕、陳琳の、『藝文類聚』巻八四に曹丕、王粲の、『太平御覧』巻三五八及び八〇八に曹丕、王粲、陳琳の作がそれぞれ録されている。『全後漢文』巻九一及び九二、『全三國文』巻四を参照。

8 『藝文類聚』巻七四。

9 同右。

10 『韓非子集解』巻四、『諸子集成』所収、北京、中華書局、一九五四年、六六頁。

11 『史記』巻八一、北京、中華書局、一九八二年第二版、二四三九—二四四一頁。

12 『大正新脩大藏經』T55n214p-007-004828。

13 『太平広記』巻二三〇、北京、中華書局、一九六一年、一七六一—一七六七頁。

14 『太平御覧』巻九一二、北京、中華書局、一九六〇年、四〇四一頁。



- <sup>15</sup> 『太平広記』卷二〇八、北京、中華書局、一九六一年、一五八八—一五九一頁。  
<sup>16</sup> 錢鍾書は、「購」は「賺」の誤りであろうと指摘している。錢鍾書『管錐編』、北京、生活・読書・新知三聯書店、二〇〇七年、一一二〇頁。  
<sup>17</sup> 『太平御覽』卷七四八、北京、中華書局、一九六〇年、三三一九—三三三〇頁。